

見過ごされている中高年シングル女性の貧困

—ノンフィクションライター／大学講師 飯島裕子さん—



貧困の背後にある社会構造上の問題

現在、おひとりさま（シングル女性）は決してめずらしい存在ではない。東京都在住の50歳女性の未婚率は20%を超えており、ここに離別、死別したおひとりさまを加えればさらにその数は増える。女性のほうが総じて長生きのため、70代、80代と歳を重ねるほど、おひとりさま女性の数は増えていく。もはやおひとりさまはマイノリティではないはずなのだが、その存在は社会の中で非常に見えづらい。

たとえばシングル女性の貧困率が高いことはあまり知られていない。20～64歳のシングル女性の4人に1人、65歳以上では2人に1人が貧困状態にある。しかし社会課題として認識されることはほとんどないのが現状だ。実は中高年女性の貧困には日本の社会構造上の問題が色濃く反映されている。

高齢になると老齢年金が主な収入源になるが、学校卒業後から定年まで働き、厚生年金を40年以上払い続けても月々の年金額は10万円に満たないというシングル女性が非常に多い。第3号被保険者として国民年金の支払いを免除されてきた夫と死別した女性よりも年金額が下回ることも少なくない。背景には女性の賃金の低さがある。厚生年金には現役時代の賃金が反映されるため、男性に比べ賃金が低く、非正規雇用率が高い女性が受け取れる年金が低額なのは当然の結果とも言える。

日本の税や社会保障制度は「女性は結婚して専業主婦となり、正社員の夫に扶養される」という「標準世帯モデル」をもとに設計されてきた。配偶者控除や第3号被保険者制度がその典型であり、老後は夫の厚生年金と妻の国民年金を合わせて生活することを前提として作られたモデルである。その結果、このモデルの枠外に置かれたシングル女性は「想定外」の存在としてさまざまな不利益を被ってきた。シングル女性が現役時代の男女間賃金格差や「標準世帯モデル」から外れたことによる不利を老後も背負い続けなければならないとは何とも理不尽なことだと愕然としてしまう。

アンケート調査から浮かぶ困難な現状

先ごろ中高年シングルの当事者団体である「わくわくシニアシングلز」が、40歳以上のシングル女性に対してアンケート調査を実施し、2390人が回答した。結果を少しだけ見ていきたい。働いている人のうち、半数以上が非正規雇用であり、うち6割が年収200万円未満であった。貯金額は約6割が300万円未満、4人に1人は貯金がないという。また賃貸住宅に暮らしている人が多く、家賃も大きな負担となっている。経済的にゆとりが

ないことが心身にも影響を及ぼしており、生活が苦しいと答えた人のうち、健康状態がよくないと回答した人が半数以上にのぼっている。また年金受給者のうち、半数以上が月10万円未満であり、70歳を超えても働いている人が4割強となっている。相談先として自治体の相談窓口をあげた人が11%、男女共同参画センター等の女性相談をあげた人は3%にとどまった。

働いているが賃金が低い非正規雇用であること、家賃負担が重く、生活がギリギリの状態であること、年金だけでは生活が厳しく、働き続けざるを得ない現状なども浮かび上がってくる。また公的機関に相談したいと思っても一体どこに相談していいのか、また現実的に受け入れ先があるのかどうか分からないことも深刻な問題だ。

現在、40代後半から50代前半に差し掛かっているいわゆる就職氷河期世代は男女ともに非正規雇用率が高く、未婚率も高い。この世代が老後を迎える時、未婚または配偶者と離別した女性の約半数（290万人）が生活保護レベル以下の生活を余儀なくされるという試算もある。

誰もが生きやすい世の中のために

冒頭に記した通り、シングル女性の数は増え続けており、もはや“想定外”な存在ではなくなっている。近年、ジェンダー平等や男女間賃金格差についての政策は進んでいるものの、未だに正規、非正規の間の格差は大きい。社会の中で見えづらいのならば、声を上げ、苦境を訴えればよいという意見があるだろう。しかし当事者の中には「この生き方を選んだのは自分」という自己責任論が根強く、それが声をあげづらい状況に繋がっている。しかし自己責任とを感じる背景には、社会の側からの無言の圧力がある。

どんな状況でも、どのような生き方を選んだとしても、一人ひとりが自立して生きていける世の中こそ、誰もが生きやすい世の中であるといえる。ぜひ他人事と思わず、中高年シングルの抱える現実を知り、社会の仕組みを変えてもらいたい。

◆◆◆ 飯島裕子さんプロフィール ◆◆◆

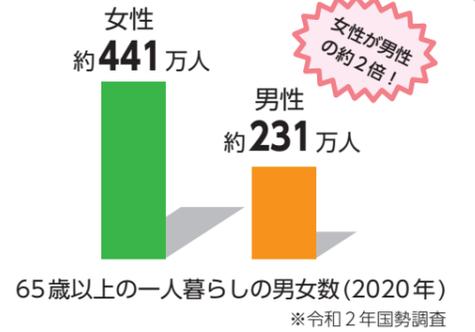
一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得退学。人物インタビュー、ルポルタージュを中心に、ビッグイシュー日本版、Yahoo! ニュース個人等で取材、執筆を行っている。著書に「コロナ禍で追いつめられる女性たち」（光文社）、「ルポ貧困女子」（岩波書店）等がある。

ひとりでも、自分らしく、安心して生き続けられる社会に

増え続けるおひとりさまシニア

一人暮らしの65歳以上の人は、男女ともに増加傾向にあります。65歳以上の男女それぞれの人口に占める割合をみると、1980年には男性4.3%、女性11.2%であったのが、2020年には男性15.0%、女性22.1%となっており、2040年には男性20.8%、女性24.5%と推計されています。

※出典：『令和5年版高齢社会白書』（内閣府）



おひとりさまシニアが抱える不安や問題

日常生活の細々としたことから、経済面、精神面、さらには家族や親族がいることを前提に設計されてきた社会制度の壁まで、様々な困難があげられています。



おひとりさまシニアの声に耳を傾けて

内閣府は、『男女共同参画白書（令和4年版）』の中で、人生100年時代を迎え、日本の家族と人々の人生の姿は多様化したとし、「今後、男女共同参画を進めるに当たっては、常にこのことを念頭におき、誰ひとり取り残さない社会の実現を目指すとともに、幅広い分野で制度・政策を点検し、見直していく必要がある」と述べています。おひとりさまシニアの声を聞き、一人ひとりに寄り添った支援や解決策を考え、取り組んでいくことで、ひとりでも自分らしくイキイキと、最期まで安心・安全に暮らしていける社会にしたいですね。

はばたき21 相談室

困った 辛い そんなときは **男女平等推進プラザ「はばたき21」** へ 誰かと話したい

はばたき21 相談室

こころと生きかたなんでも相談

火曜日・土曜日・日曜日 10:00～16:00
水曜日・木曜日 17:00～21:00

※面接・電話・オンライン(ZOOM)
面接相談は女性のみ
電話・オンラインはどなたでも
オンラインは火・土・日のみ

☆相談無料、秘密は厳守します。

コミュニティ・カフェ

毎月第3土曜日 14:00～15:30
男女平等推進プラザ 調理コーナー
(台東区生涯学習センター 4階)

☆参加費無料、予約不要です。

女性弁護士による法律相談

毎月 第1土曜日 13:00～16:00
第2水曜日 13:00～16:00
第3木曜日 10:00～13:00
第4火曜日 16:00～19:00

※面接・電話どちらも可(女性のみ)

ホッ

コーヒーを飲みながらお話ししたり、小物作りを楽しんだり、過ごし方は思いのまま。お気軽にご参加ください。